

---

# 東北芸術工科大学 紀要

## BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第26号 2019年3月

まちづくりと舞台制作

— 舞台作品《多賀・光の多面体》の事例研究 —

Town Development and Stage Production

— A Case Study of the Performing Arts Named TAGA/Bright POLYHEDRA —

志賀野 桂一 | SHIGANO Keiichi

---

# まちづくりと舞台制作

## — 舞台作品《多賀・光の多面体》の事例研究 —

### Town Development and Stage Production

#### — A Case Study of the Performing Arts Named TAGA/Bright POLYHEDRA —

志賀野 桂一 | SHIGANO Keiichi

---

The content is a case study of a cultural project which was conducted in Tagajo-city, Miyagi prefecture for the purpose of community development by cultural art. Specifically, the authors of this article work on direct business, held in Tagajo city in recent years, and pick up three stage performances that have achieved great results. Among them, I will cover the performing arts work which was carried out under the name “TAGA/Bright POLYHEDRA” in particular. Planning and directing of the production of the work, and further describing the preparation from the performance to the execution. It is a contemplation to think about new ways of creating value in cities.

#### Keywords:

文化事業、まちづくり、舞台芸術、古代コンテンツ、もののあわれ、相聞、和歌、万葉集、歌舞、ダンス、オペラ、ブッチェーニ、大伴家持、藤原定家、山口女王、  
cultural project, town planning, performing arts, ancient content, Japanese mind, so-mon, Japanese poetry, manyo-shu, singing, dance, opera, Giacomo Puccini, Otomo Yakamochi, Fujiwara Teika, Yamaguchi Okimi

---

## 1. はじめに

東北地方の各市は、過疎化・少子高齢化や人口減少、中心市街地の空洞化など全国的に見ても厳しい環境下におかれている。まちづくりを考えるうえで、地域振興は共通の命題となっている。特に東日本大震災による打撃を受けたまちにおいては、心の復興を含めた地域再生が求められてきた。そうした中で文化の力によってまちづくりと創造的復興にしようとする都市が増えている。

本稿で取り上げる多賀城市は、2016年度、JR仙石線多賀城駅前に新図書館の整備をはじめ、2017年度、市役所内に市民文化創造局という組織を新に設け、文化の力を活用したまちづくりに気概を持って邁進している。筆者は当該市の「市民文化創造アドバイザー」に就任し、新たな政策の具体化に向けた取り組みを支援しているところである。

ここ数年来、多賀城市の展開してきた文化事業には目を見張るものがある。文化によるまちおこし、まちづくりには文化施設の整備だけでは足りなく、ハードウェアとソフトウェア、さらには人的ネットワークなどを含めたヒューマンウェアがそろった都市の文化戦略が欠かせない。同時に筆者は、市民自らの活動を通して住民意識の変化をもたらすようなクリエイティブな事業やプロジェクトを間断なく実施することが重要と考える。

本稿は、こうした目的で行われてきた舞台芸術作品の創作、具体には「多賀・光の多面体」という舞台公演を中心にその企画から実施までを詳述し、今後の都市における新しい価値創造のあり方などを考えようとする論考である。

文化によるまちづくりと一口に言っても、そのアプローチや

方法論はいくつかあると考えるが、筆者は「創造都市論」的なアプローチ(図1)を行っている。またまちづくりの政策(文化による都市政策)を推進するにあたっては文化戦略を構築する必要があり、そのための方法論も重要と考える。



図1. 文化政策のパラダイムシフトと創造都市論的アプローチ

特に筆者が重要視しているのが都市固有の歴史、またはDNAとでもいうべき各都市の根底に存在する「何か」を探り当てることである。現在取り組んでいる事業が成功裏に進んでいるとすれば、その「何か」が適切に掘り起こされ活用されている結果と考えるのである。さて、その「何か」がどのようなものであるかを議論する前に、多賀城市の概要と特色を見ておこう。

## 2. 多賀城市の概要

多賀城市は、歴史が古く、古代においては724年に国府が置かれ大宰府と並んで東北唯一の政治拠点であった。

多賀城は奈良・平安の古代都市で、古代の面影としては建物など基礎石のみで構築物はないが、名所や史跡が数多く残っている。しかし鎌倉時代を迎えると多賀城は歴史の表舞台から消えていくといわれている。

現在人口は6万人余の都市である。塩竈市などとともに多くの住民の職場は、200万人の仙台都市圏(仙台市の人口は108万人)に依存し、仙塩都市圏を形成している。

歴史の地形がそのまま残り、東西軸の交通は曲がりくねった道や丘陵地が多く坂道も多く通過交通は不便である。しかし南北軸の交通では、産業道路、国道45号線、35号線、鉄道はJR東北線、JR仙石線の2本が直線的に走り

交通の便もよく、JR線で仙台都心まで約20分の距離にある。したがって住民も通勤通学など仙台都市圏の<ベッタウン>という性格が強く「多賀城らしさ」をあまり意識せずに暮らしている。行政の職員の間でも《へそのない街》という言葉が漏れるほど「都市のアイデンティティー」が希薄な街となっている。

まちづくりの観点からは、便利で住みやすいというだけではなく、街に対する誇りや愛着が生まれ、「この街が好き」、「この街に住み続けたい」さらに「この街に住んでいる私が好き」といったいわゆる《シビックプライド》が住民の多くに醸成されることが望まれると筆者は考える。このためには、他都市にない固有の名所旧跡や自然のほかには精神的支柱ともなる何かを見出さなければならない。

## 3. 都市の分析と「古代コンテンツ」

### A空間軸

都市分析の手法として筆者は、A空間軸とB時間軸、さらにC文化軸を加え分析を試みてきた。

A空間軸について簡単に触れておくと、多賀城市の概要でも述べたが、都市計画において、交通、特に道路網の整備は常に大きな課題である。地勢的な見地で交通網を見ると南北の軸が直線的で、横軸ともなる東西交通が不便という特徴がある。

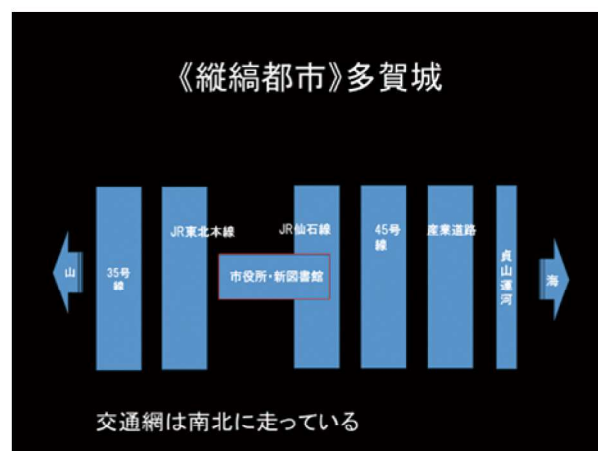


図2. 交通網を分析すると多賀城市は、《縦縞都市》に見える。



筆者はこれを名付けて「縦縞都市」(図2)と称し、新しい発想での都市計画の必要性を指摘してきた。従来型の都市計画においては、ともすると基盤の目状の均一な東西道路、あるいは都心を中心とした同心円状の交通などを理想形として描こうとする。古代より多くの丘陵地が連なる多賀城市の地形は、こうした近代都市の理想からはマイナスな側面としてネガティブに考えがちである。しかし、アメリカ合衆国の女性ノンフィクション作家・ジャーナリスト、ジェイン・ジェイコブズ(1916- 2006)を持ち出すまでもなく、これらの特徴をプラスにとらえる視点を持ちたいので、筆者は「多極分散型」の都市イメージと、思考モデルとしてのリゾーム(図3)の有効性について提案してきた。

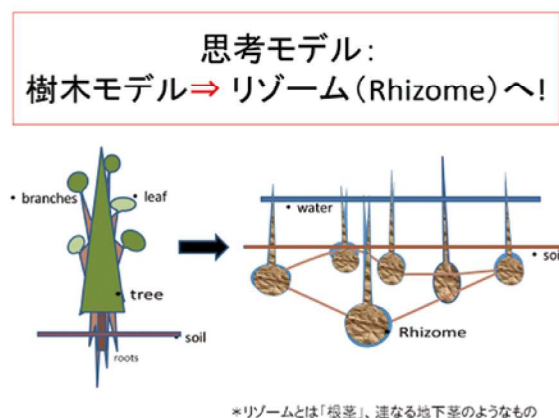


図3.思考モデル:左が樹木モデル、右がリゾームモデル

この考え方は後述の事業展開の方法論とも通底することになる。

#### 都市のB時間軸とC文化軸

筆者は、都市分析において、B時間軸とC文化軸は特に重要なファクターと考えている。

都市の成り立ちから現在、そして未来へ向けての新たな社会的・文化的価値創造を検討する足がかりは過去に多くのヒントがあると思うからである。地域ならではの文化資源、あるいは都市固有のDNAとでもいうようなコンテンツが未来を拓くカギになる。

多賀城市は、国府の置かれた724年、奈良・平安時代には、大宰府と並んで東北随一の政治拠点であり、輝かしい歴史都市であった。また、伝来の仏教は、真新しい文化とし

て当時の社会に大きな変化とインパクトを持っていた。しかし「多賀城は1192年鎌倉幕府が出来、武家の時代を迎えると歴史の表舞台から消えていく」と寂しげに記述される。

まちの歴史は、端に為政者の歴史ではなく、民の歴史を含めた連続したものであり、その中に豊かな物語があったはずである。筆者は、土地固有の文化史を探し、新しい都市の物語を創ることは文化政策における基本的な事と考える。こうした見地から、多賀城市で「史都から詩都へプロジェクト」という市長のエッセイをヒントとして、「世界絵本フェスタ」を計画・実施してきた。

次の段階で、見えてきたのが、歴史のまち多賀城における<古代>の見直しと再認識の重要性である。このことを掘り下げることによって筆者は、現代に通じる《シビックプライド》の基となる都市の「何か」が見えてくると思えてきたのである。この「何か」を「古代」に求め、多賀城市の文化事業の基底のコンセプトにしようと考えた。(図4)また数年の企画事業を実施するにしたがって、事業の位置づけも固まってきたのである。

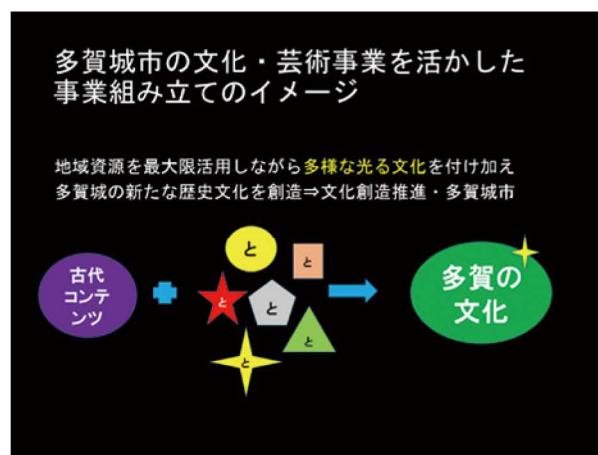


図4.多賀・光の三部作を提案するに際して、芸術事業の位置づけ

古代の日本における、仏教文化と<和>の文化とのぶつかり合いの中で、和歌の存在意義は大きいものと筆者は考える。万葉の<歌の世界>や宗教感、中でも重要視されている「もののあわれ」を主題にできないものかと思ひ企画・構想したのが「多賀・光の多面体」であった。そのほか古代には、和歌・短歌ほかスピリチュアルな世界が広がっている。多神教的な自然宗教、加えて仏教、道教(タオイズム)儒教など大陸由来の当時としての新興宗教を加え豊かな精神世界が見えてくるように思えた。これらを習合して筆者



は「古代コンテンツ」と総称した。

「古代コンテンツ」と名付けた「和」の精神世界、とりわけ古代の自然観や、美意識・心の在り様は、今に活せる素晴らしいものを持っていると筆者は考えたのである。

古代貴族社会から武家社会へと歴史が動くのであるが、日本の古典芸能を見ると舞楽(伎楽・雅楽)から室町時代に始まる能楽(能・狂言)、その後の文楽(人形浄瑠璃)、歌舞伎と続くが、いずれも現代に受け継がれ重層的に存在している。こうした特徴は、舞台公演を企画するうえで、どの時代から何を抽出しコンセプトを打ち出すか筆者にとっては発想の源泉となっている。

#### 4.文化事業の展開—多賀・光の3部作

筆者は、多賀城文化創造都市へ推進フェーズを、  
第Ⅰ イメージアップ期:「史都から詩都へ物語都市」  
第Ⅱ 古代コンテンツの再認識期「史都の見直し」  
第Ⅲ プラットフォーム形成期「文化創造都市のための」  
第Ⅳ 多様な展開期「文化創造都市」  
の4区分として考え提示してきた。

本稿の主題は、この第Ⅱ古代コンテンツの再認識期(2016年～2018年)に実施され、筆者が企画・制作した《多賀・光の3部作》である。

「スペースオペラ《KEGON》」(2017年)と、「多賀・光の幻舞」(2017年)、「多賀・光の多面体」(2018年)という3つの事業であった。これらは、いずれも多賀城市の重要な文化事業と位置付ける「東大寺展」のプレ企画として実施されたのである。以下概略を述べておく。

##### (1) 「スペースオペラ《KEGON》」概要

◇実施日:2017年3月25日

◇会場:多賀城市文化センター大ホール

◇基本コンセプト

今日、戦乱や大災害に見舞われている世界に向け、《華嚴》のテキストに記される「光明遍照」(こうみょうへんじょう)は、無限の光が遍く照らしだされる世界観である。東大寺展はこのことを現代社会において蘇らせることとなり重要な意義があると考え。東大寺の根幹をなす《華嚴経》とい

うテキストにインスパイヤーされ、「光明遍照」のイメージを可視化した舞台作品である。

現代音楽を、松下功に新作委嘱(組曲を作曲依頼)し、《アンサンブル東風》室内オーケストラによる世界初演の舞台となる。舞台美術には、光のアート造形作家として実績の豊富なヤマザキ・ミノリ、背景画には巨大画で東日本大震災以来世界的注目を浴びている加川広重という2人のアーティストの協力で舞台空間を構成。ダンスには当代きっての身体性と和にこだわった作品で注目を浴びる森山開次、地元から創作モダンダンスで評価の高い佐取純子、そのスタジオ教師クラスのダンサーで構成される。

人間の身体の細胞に組み込まれているマイクロコスモと、大宇宙まで、舞台全体を宇宙空間と見立て、光と音楽・ダンスのスペクタクルな演出で展開する歌のないオペラの試みである。(写真1)



写真1.スペースオペラ「KEGON」の第2シーン

また、「KEGON演出ノート」では、次のように書き、成長した若者役の人物は、破壊の神「シバ神の化身」という設定であることを暗示した。

「ニーチェの『ツァラストラはこう語った』で<神は死んだ>といって、信仰心の熱い人々にショックを与えたが、シリアの状況などを映像で見ると、メソポタミア文明の発祥の地が無残な瓦礫と化している。ここには破壊の神という別の神が生きるとしか思えない光景だ。

このスペースオペラのテーマとしているのは、人類の救済などではなく、個々の人間が持つ破壊と創造、信頼と猜疑、慈しみと無頼、憐憫と苦悩、そして愛と憎など相反する心の解放、悟りを求める人間の苦悩を身体で示

す。

わたしたちはどこからきてどこに行くのか。そしてわたしたちは何者なのか?そうした答えのない旅を私たちはしているのではないかと考えるところから出発している。

その導きのテキストは、華厳という經典なのである。」

## (2)「多賀・光の幻舞」の概要

年度が替わって、多賀・光の3部作、第2弾「多賀・光の幻舞」舞台公演が以下のように実施された。

◇実施日:2017年10月7日、10月15日

◇会場:多賀城市文化センター 大ホール

◇企画:〜古代と現代を繋ぐ《舞》の系譜

宮城県多賀城市は、古代国府の置かれていた歴史のまちである。2011年以来東日本大震災からの復興活動が東北の各市で取り組まれている中、多賀城市は、2015年度から市民文化創造のまちづくりに力を入れてきている。その一環として奈良の東大寺との連携で、地方創生に向けた文化芸術を核としたまちづくりをすすめている。

東大寺は創建以来2度の火災などで焼け落ちるという苦難に遭いながらも、多くの人々のチカラが集まって復興を遂げてきた。その厄災の度に新たな文化を創造し、人々に希望と勇気を与え続けてきた復興の歴史が、東大寺の歴史である。此度、天平産金の縁をもとに、陸奥国府が置かれた多賀城で東北初となる「東大寺」特別展を2018年度に開催することとなった。この企画の意図は、1260年以上もの歴史の中で受け継がれてきた東大寺の歴史を紐解くことで、東北復興の“今”と“未来”を照らす道灯りとするのが目的である。

2015年度に駅前に新図書館を完備し、＜世界絵本フェスタ＞を開催、舞台芸術分野では、絵本オペラ「魔法の笛」を成功させた。2016年度にはダンスと光のアートと現代音楽を組み合わせた「スペースオペラ《KEGON》」を実施し、創造性に富む舞台芸術を多賀城の地より発信してきている。

これに引き続き、2017年度は、「古代と現代を繋ぐ《舞》」をテーマに、時空を超えた華厳の世界観を背景にしながら、「多賀・光の幻舞」と題した事業となっている。

今回、アジアを源流としてその底に流れている西欧のバレエやダンスなどの舞踊＜Pas(仏語)＞とは異なるアジ

アの宇宙観が織り込まれた身体表現、インド民族舞踊をはじめ、伎楽、能楽、日舞を紹介する。現代に脈々と受け継がれている《舞》の系譜を辿ることで、日本の舞踊(踏)・ダンスなどの独特の＜型＞を知るとともにトークセッション解説を交えて、アジアの身体表現・所作の多様さと面白さを2週にわたって体感してもらう企画となっている。

\*東京オリ・パラBeyond 2020 認証取得

このような企画で出発したものの、後日談があり、インド民俗舞踊団の伝染性の病気になるというアクシデントに見舞われた。対応策として、保健所の指導に従って公演自粛の措置を取り新聞等で広報したが、知らずに来られるお客様対策として、中村明日香と筆者のトークショウの時間を大幅に拡大し、インド舞踊はDVDで紹介するほか、舞踊史の話で縫合することとなった。



写真2.多賀・光の幻舞のトークショウ(左から中川、津村、筆者)



写真3.多賀・光の幻舞の伎楽公演



◇主催:多賀城市、震災復興祈念東大寺展実行委員会

◇出演者(団体):①インド舞踊:ラダック舞踊団(インド政府  
派遣インド民族舞踊団)

②伎楽:天理大学雅楽部

③能舞「大和は」:津村禮次郎

④同・和太鼓:ATO高橋兄弟、

⑤同・フルート:木ノ脇道元(きのわきどうげ  
ん)

⑥日舞「老松」:中川雅寛

⑦詩吟・日舞:菊池すみ子(花柳流)ほか



写真4・5.多賀・光の幻舞の解説(左:筆者)、伎楽公演(右)

◇企画・構成・舞台美術:志賀野桂一

◇舞台美術協力:ヤマザキ・ミノリ



写真6・7.多賀・光の幻舞の日舞(左:中川)と万葉踊り(右)

◇スタッフ:音響・照明:東北共立

舞台監督:舞台監督工房(石井忍)

カメラ:熱海俊一

制作:飯田利加、高塚美奈子、氏家美幸

◇広報・運営:電通東日本

◇構成・台本:多賀・光の幻舞 古代と現代を繋ぐ《舞》の  
系譜(進行台本省略)



写真8.多賀・光の幻舞の「能舞」舞台(中央:津村)

この中で、能舞は、以下のように解説された。

「大和は国のまほろば」の万葉の詩をテーマに、遣唐使と共に唐に渡った「阿倍仲麻呂」がモチーフとなっています。時は705年奈良時代、「阿倍仲麻呂(あべのなかまろ)」が遣唐使に従う学生として選ばれ16歳で唐に渡り玄宗皇帝に仕えました。50年余の間帰ることがありませんでした。その仲麻呂の望郷の思いを通して、大和、平安の世から現代へと続く、日本の文化の継承と平和を讃えます。万葉の詩は、仲麻呂の和歌、高砂の謡、古今集などの歌を使います。フルートと和太鼓というシンプルな音楽構成で、前半は古典的な音楽と舞、後半はやや現代的な演奏となります。

原作・林望能作・津村禮次郎「仲麻呂」より。舞・謡:津村禮次郎(観世流シテ方)



写真9・10.多賀・光の幻舞「能舞」公演

## 5. 多賀・光の多面体

この2つの舞台公演事業を経て、翌年「多賀・光の多面体」公演の企画が計画されることになる。



## (1) 企画書

◇企画書キーワード:東大寺展、多面体、和歌、相聞、  
光のアート、《古代コンテンツ》の可視化、もののあ  
はれ、古代貴族、

◇仮タイトル:光のアート・音楽・舞・劇による

多賀・光の多面体TAGA / Bright POLYHEDRA

または、(仮)多賀・光の多面体GALA

～音楽・舞・劇・ライトショー～

◇企画趣旨:多賀城市は、東日本大震災の復興事業とし  
て、2018年度に東大寺展を行います。これに  
向けて様々なプレ企画(世界絵本フェスタ、絵  
本オペラ《魔法の笛》、スペースオペラ  
KEGON、多賀・光の幻舞、など)を行ってまい  
りました。

2018年度は、東大寺展を大きく盛り上げる  
ために多賀城市・実行委員会の主催で「多  
賀・光の多面体」～光のアート・音楽・舞・劇によ  
る～水上能舞台公演を提案することになりました。

主題は、「もののあわれ」を重要な価値尺度  
とする古代社会、多賀城縁の相伴家持と山口  
女王との相聞を主軸に、揺れ動く男女の心を  
表現しながら、見えないモノの価値や美意識、  
見えないけれども大切な心のありようなど現代  
社会にも通じる「古代コンテンツ」を“古の歴史  
都市”多賀城市に蘇らせ、現代を見つめる企  
画となっています。

◇舞台展開(多面体6つのキーワード): Light光明、  
Beam光線、Flash閃光、Twinkle星の光り、Glimmerか  
すかな光、Brilliance輝き

◇共有イメージ:図5多面体6つのキーワード

◇構成:多面体6つのキーワードをもとに、場を区分し、場毎  
に出演者・アート作品・演目などを足し合わせ方式  
で決めていく。メインステージでの「音楽・舞・劇・ライ  
トショー」公演。史跡公園・博物館周辺に光のアート・  
インスタレーション。能舞台回りの水上に光りのオブ  
ジェまたはアート作品。

## 多面体6つのキーワード



図5.多面体という言葉を基に、光の名前を付けて場の構成する

◇会場:県立歴史博物館水上野外能舞台、多賀城史跡、  
森の小道(Art Walks)、水面、博物館野外回廊

◇会期:2018年5月4・5日

(リハ2・3日、6日予備日)

◇主催:多賀城市・復興祈念東大寺展実行委員会

◇メイン舞台進行イメージ:図6、図7

◇展開:夜は、初日・2日目を通して一つの物語となるように  
構成する。

・初日2日目共通で、6つの光によってシーンが進行  
する。

・夜の部の始まりは、共通のライトイングショー。

◇物語:初日は、藤原定家の新古今和歌集より「桜色の庭  
の春風あともなし訪はばぞ人の雪とだに見ん」もの  
のあわれの世界観が展開。能「融」より塩竈の景色  
の見立てなど歌の世界を展開。歌、「陸奥はいつく  
はあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」。(古今  
和歌集1088みちのくのうた、読人知らず)さらに、  
山口女王が史跡後より、森の小道を通り、歩いて水  
上能舞台まで登場して終了。

2日目は《相聞》の夕べ。

山口女王の能舞台へ登場より始まる。歌「鹽釜の  
まにに浮きたる浮島のうきておもひのある世なりけ  
り」。その他の相聞歌・相聞演奏・相聞舞・相聞ダン  
ス・相聞劇「吾が背子は相念(おも)はずとも敷栲の  
君し枕は夢(いめ)に見えこそ」など。地上のダンス  
(または水上のダンス)。戦乱の予兆・現代への架け  
橋へ、様々な演奏。

お昼・午後の部は、出演者に了解の得られる演

奏者に演奏の機会をつくる。(昼の賑やかし)

水上および史跡公園のアート・インスタレーションを一週間程度開催する。

水上ステージの周りの水面に6基のイントレを組んで照明・音響の仕込とする。水上に組めないときは陸側に設置する。現代アートを水面または史蹟・森の小道(Art Walks)を設置する。

## 多賀・光の多面体イメージ



図6. アート・インスタレーションと舞台公演を続けて展開する

## 2日間のメイン舞台展開

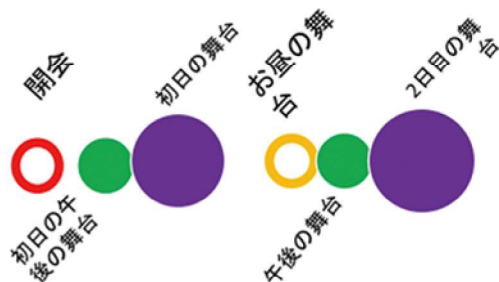


図7. 2日間の舞台展開を想定したイメージ

2日間を設定するメリットはどちらかが晴れる可能性で、雨対策(ホール抑え)を回避しやすい。動員数を増やせる。経費は2倍にはならない。

《和》の方法論ともいえる、「揃い」「合わせ」「重ね」といった展開方法を提案する。その中に主題となる「相聞」というキーワードで、出演者を構成する。

## 《相聞》の造り

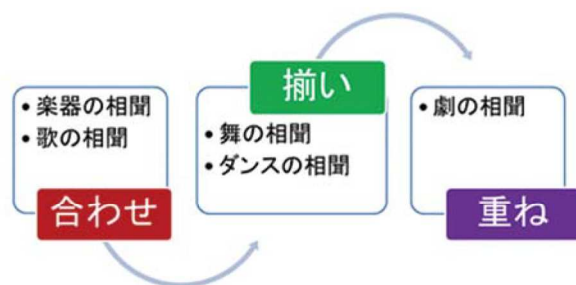


図8. 《相聞》というキーワードで各パートを構成する

相聞関係:Vn2名、ソプラノとテノール2名、能楽師2名、ダンサー2名、役者2名といった「合わせ」「揃い」「重ね」といった和の方法論を舞台コンセプトに援用して、出演者を選定していく。

こうしたイメージを伝える企画書を作成し、市の採択を待った。準備期間が極端に少ない中での企画であり、しかも会場が野外ということもあり様々なリスクが横たわることの出発となった。企画が採択された後は、企画イメージを基に予算に合わせながら実行計画を作成していった。

### (2) 実施に向けて

計画の大きな枠組みで、筆者が心がけたことは、舞台構成の妙とでもいうべき点にある。野外のリスクが様々な想定される中で最も大きな脅威は天候である。本番途中に風雨が突然来る可能性が否定できない。こうしたことをあらかじめ読み込んで創ったのが、1夜2夜とも6つのステージという細分化して展開する構成だった。どこで雨が降っても個々のステージが中止になっても、物語の骨格を崩さずに進行させることが出来ると考えたのである。また、小ステージでの展開は、稽古の個別化ができ、全員揃わなければ稽古できないといったリスクを避けるためでもあった。内容的には2夜にわたる公演が、一つの物語の展開と統一感を持たせなければならない。しかし、観客は、2夜続けて観てもらえるとは考えにくい。それぞれの1夜だけでも観てもらえれば、楽しめて、物語に参加できるにはどうしたら良いのかという点が、最も苦心した点であった。



技術的側面での野外公演の困難さと特殊性は、大きなハードルである。劇場ホールと異なり、ステージと観客席（スペース）はもとより、ホールには当たり前のように具備されている音響・照明、楽屋などの付帯設備を新たに仮設に設けなければならない。これには、野外に仮設の劇場をつくるのと同じである。安全面も確保しなければならず周到な準備と計画、そして多くの予算が投入される分野である。

こうした点を踏まえ、会場予定地のロケハンを何度か重ねた。既存の能舞台と階段状の土手を観客席にあてることや、小編成の演奏団の演奏と指揮・副指揮の場所決めをしていった。現場に対応した照明・音響などの技術系のインスペクションを重ね、最少費用で最大効果を得るための検討がなされた。写真11は、正面から舞台への眺め、写真12は、隣接の博物館の屋上から全体を俯瞰した眺めである。

当初、筆者は、水の上の多様なアートを想定していたが費用面で断念し、光のアーティストのヤマザキ・ミノリ氏一人に託すことになった。氏は多賀城市で「万灯会」などこれまでも実績があり、この環境一目見るなり、水の上ではなく、水中に光を入れる提案をしてきてくれた。即座に筆者も共感を覚えた。なぜなら風の影響がなく、水中に光が灯れば幻想的な光景になると確信できたからである。しかし技術的にも、費用的にも果たして可能なのか。氏には何度も調査をしていただき、水深、見え方、設置の足場など様々な面で、可能なアートを模索していった。



写真11. 観客席からメインの能舞台を望む

特殊照明では奥村知行に依頼した。今日のプロジェクション・マッピングの進化は目を見張るものがあるが、ともすると映像ショーとして素晴らしくとも、観客の心に深く届けるに

は課題が多いと思われる。映像スピードが速すぎ人間のパフォーマンス・スピードとうまく合わない。また、テレビ的に見えて、環境と溶け合わない。など筆者が日ごろ感じていることを、氏に話し、もっと野外の自然と溶け合って、人の演技を壊さないレベルでの光のプランをお願いした。



写真12. 歴史博物館屋上より会場を望む

当日の風雨、特に風の影響が大きく、リハーサルがままならない中のオペレーションであったが、背景となった森へのマッピングと、舞台へのレーザー照射の組み合わせは、さすがのものがあつた。こうした技術検証を経ていよいよ、実行計画が練りあがっていったのである。

### (3) プログラム

公演のプログラムには「多賀・光のシリーズ」の集大成と題して以下の文章を掲載した。

多賀城市は、これまで東日本大震災の復興祈念特別展「東大寺と東北」を目指して、プレ企画として「スペースオペラKEGON」、「多賀・光の幻舞」などを行ってまいりました。

今回「多賀・光の多面体」のねらいは、古代都市として有名だった多賀城という土地に存在した古の世界観・情趣を、歌や舞で表象化し舞台作品として提示するものです。

<花が香しく咲く朝>、<柳に風が涼しく吹く夕べ>、など古代の人々の愛でて止まなかった景色や感興を込めた31文字の和歌は、日本人の美意識のあり様を見事に表しています。ここには「尽きることのない物事」や「自



然のうつろい」が貴賤の軒別なく、人の心に投影され、「趣」や「もののあはれ」という古代人の価値観となっていることが分かります。

本公演の主題は「もののあわれ」で、多賀城ゆかりの大伴家持と山口女王との相聞を主軸に、揺れ動く男女の心を表現しながら、見えないけれども大切な時の流れ、《うつろい》など現代社会にも通じる「古代コンテンツ」を“歴史都市”多賀城市に蘇らせ、現代を見つめる企画となっています。

#### ●＜見立てと化身＞

オペラと古代絵巻という異質のコンテンツを融合するにあたって考えたことは、両者のクロスポイントをどの様につくかであった。そこで発想したキーワードが、「見立て」と「化身」であった。

「見立て」は、江戸時代の芸術創作上の趣向の一つ。江戸文芸の全般に共通の趣向であるが、ここでは歌舞伎などでは演出で、周知のある形を背後に想像させるような特別の形を作る場合に使われる。あるものを、それと似た別のもので示すこと。「庭園に富士の見立ての山を築く」などあるものを他になぞらえることを指す。

また「化身」は仏語で世の人を救うために人の姿となって姿を現した仏で応身（おうじん）ともいうが、神仏などが姿を変えてこの世に現れること。また、「神の化身」「悪魔の化身」など抽象的で無形の観念などが、形をとって現れたものとされている。こうしたいわば「和」の方法論を駆使して構成台本をつくることになった。

プログラム用のヘッドコピー、リードコピー及び解説文が以下のとおりである。

#### ＜プログラム当日用・中面上段ヘッドコピー＞

##### ～古代と現代を結ぶオペラチック・ナイト～

水上の能舞台で繰り上げられる歌と舞と劇による＜二夜かぎりの動く絵巻物＞

#### ＜中面上段リードコピー＞

「もののあわれ」が重要な価値とされた古代の日本、東北多賀城で没した大伴家持（おほとものやかもち）と

謎の多い山口女王（やまぐちのおほきみ）との相聞を主軸に、揺れ動くさまざまな男女の心模様が展開されていきます。現代社会にもつながる、見えないけれども大切な価値、自然観・美意識・心のありようなど「古代人の情感」を蘇らせ“古の歴史都市”にたっぷり浸っていただく二夜です。

#### ＜中面中段タイトルとリード文（解説）＞

##### ●もののあはれと相聞歌

① この物語は、山口女王（やまぐちのおほきみ）の夢想（心の旅）が時空を超えて 展開する絵巻物です。

多賀城を舞台にした物語を構想するにあたって、起点となったのは、「塩竈の前に浮きたる浮島のうきて思ひのある世なりけり」（『新古今和歌集』1379）という一首です。この歌は「塩竈の浦の前に浮いている浮島のように（不安定で）憂くつらく（恋の）想いが火のように燃えている男女の仲だなあ。」という意味になります。ところでこの歌の詠み手は、山口女王とされますが、「女王」といっても、どのような出自の人物か不明なのです。『万葉集』には巻四で五首、巻八では一首が収められ、全て大伴家持に贈られた歌となっています。これらに対して家持は一首も返歌していません。山口女王は片思い《悲恋の姫》なのです。この謎の多い女性が今回の物語の主人公です。

② さて思慕の対象となっている男性は、中納言大伴家持（おほとものやかもち）であります。

奈良時代の歌人、大納言大伴旅人の子、官位は従三位・中納言。大伴家持が春の宵の静けさに浸って詠んだ一首「わが宿の いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕べかも」は「私の家の、ささやかな竹林を吹く風が竹の葉をそよがせてさやさやと鳴る、その音のいかにもかすかなこの夕べであるよ（という意味）」が絵巻では紹介されます。大歌人にして往時の政治権力の中樞にいた家持、赴任先でも様々な女御と浮名を流したと推測されます。というのも男女の間で交わす相聞歌が数多く残っているからです。また後に家持の伴侶となる坂上大嬢（さかのうえのおほひめ）とは多様な相聞歌が残されています。

③ 古代絵巻ともいうべき物語に、プッチーニ作曲の2つの歌劇「トスカ」と「トゥーランドット」の場面が登場します。



この絵巻とオペラの接点は何かという点であります。

一夜目の「トスカ」では、カヴァラドッシ(家持の化身)とトスカ(坂上大嬢の化身)のそれぞれのアリアが歌われ、相思相愛の2人の絡みが展開します。絵巻の場面としては、山口女王が抱いた幻想の中での出来事という設定です。

二夜目の「トゥーランドット」は、相聞というよりは命を懸けたく愛が展開するオペラです。この絵巻では「せめて夢の中では家持と結ばれたい」という山口女王の夢がさらに膨らんで生まれたシーンです。夢の中でありながら、カラフ(家持の化身)を思慕するもう一人の娘・リユー(笠女郎かさのいらつめの化身)までが登場する波乱の展開となります。しかし、トゥーランドット姫(山口の化身)とカラフ(家持の化身)の2人は、激しい謎かけ問答の末、最後はついに結ばれるという結末となります。それを讃える民衆(合唱団)が歌います。

この場面の中で、笠女郎の和歌一首「思ひにし死にするものにあらませば千度(ちたび)そ我は死に反(かへ)らまし」(『万葉集』第四巻603)が詠まれています。これを解説しておくとして「恋のおもいで死ぬものであったら、私は千度繰り返して死んでいましょう」という意味です。笠女郎は家持に24首の歌を贈っていますが、研究者による分析によると、この歌は<千々に乱れる恋心(岡本雅彦)>と区分され、家持に対する片恋の1首となっています。歌劇「トゥーランドット」の中で、王子の名前を知っていてもけっして口を割らないリユー(琉)の献身的な性格が、私には笠女郎に重なって見えたのでした。

- ④ 平安文化にピリオドを打ったとされる藤原定家は、この動く絵巻では<古・今>を繋ぐ役割を担っています。

藤原定家は「有心体(うしんたい)」と言われる表現スタイルを確立し、古代文化の代表的歌人の一人で、新古今和歌集には46首の歌を編んでいます。絵巻では春にちなみ「桜色の庭の春風あともなし訪(と)はばぞ人の雪とだに見ん」(『新古今和歌集』巻一春歌下134)を詠いあげます。意味は「庭を桜色に染めるように花を散らしていた春風もう終わってしまった、人が訪ねてきたら庭に雪が散っていると思うだろう」ということです。

詠われるもう一首が、「来ぬ人をまつほの浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ」(『新勅撰集』巻13恋849)で、この歌を解説してみると「いつまでも現れない貴方を待っていると、まるで松帆の浦の夕風の時に焼く藻

塩のように、私の身はずっと恋焦がれるのです。」といった意味でとなります。『小倉百人一首』にも収められている有名な歌です。この音韻・リズムの(頭文字の音は、K-M-Y-M-Kといったロンド形式にも見える)心地よい一首は、平安時代の貴族文化としての和歌の完成形ともされています。この歌、『万葉集』からの本歌取りとされています。

さらに言えば、笠金村(かさのかなむら)の詠んだ長歌に対する、定家が(海女の気持ちになって)詠んだ返歌という形式で創られているのです。じつに500年の歳月を超えた相聞歌ということが出来るのではないのでしょうか。(解説文:志賀野桂一)

以下は完成台本と、出演者、使われた楽曲、場面展開公演写真を合わせ紹介してみよう。

#### (4) 台本テキスト(完成版+画像)

多賀・光の多面体TAGA・LIGHT POLYHEDRA

～古代と現代を結ぶオペラチック・ナイト～

◆舞台仕様:メインの能舞台には緋毛氈または真紅のパンチカーペットを敷き詰める。サブステージ2基の表面も同じ仕様にする。メイン舞台に野点用大傘(赤)を用意する。イントレは客席中央一基、対岸にレーザー用イントレー基。サブステージを結ぶ導線にバレエマットを敷く。橋掛かりも同様にバレエマットを敷く。\*光のアート・インスタレーションが光のアート作家ヤマザキ・ミノリによってつくられます。



写真13・14.多賀・光の多面体公演



■第一夜:5月4日の構成 [18:30～20:30]

アナウンスメント(影アナ)あさのたけふみ……3’

一般的注意事項と2日間にわたるイベントの案内、本日の時間割など



写真15.多賀・光の多面体公演

[開演]

飯田利加サブステージに登場、ナレーションの後ハケ(以下同じ)

ナレーション①多賀・光の多面体の開幕です。わたくしこのオペラのナレーションを務めさせていただく飯田利加と申します。皆さんには2夜ともお付き合いいただければと思います。

さて、この企画は、古代と現代を結ぶ「オペラチック・ナイト」としてありますが、みなさまには歌と舞やダンスによる音楽劇、光のショウを加えた《動く絵巻物》としてご覧いただければと思います。

古代の日本は中国の大陸文化の影響を受け、また吸収しようとした時代です。中国は歴代王朝の中でも、最も華やかだった頃に唐が支配していました。日本からは大陸に向けて遣唐使を次々と送り、唐の文化を輸入し続けました。そのなかでも、唐の国に渡った阿部仲麻呂(698～770)は、若くして唐に渡り、唐で高官となったものの日本に帰国できず唐で一生を終えています。望郷の思いで歌った「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」という歌が有名です。

古代の日本では、趣深いこと「=もののあはれ」が、最高の価値とされました。この物語も「もののあはれ」を主題としながら、男女の相聞が様々な形で繰り広げられることになっています。「相聞」とはもともと親・兄弟・友人の安否を尋ねることですが、「万葉集」ではやがて男女の恋

愛を詠った和歌をまとめてそう呼ぶようになります。

今夜の物語には多くの登場人物が現れますが、中心となる人物は3人です。1人目は、陸奥国「多賀城」で没したとされる万葉の大歌人、大伴家持(おおとものやかもち)、2人目は、その大伴家持に恋の歌を贈った謎多き万葉の女流歌人、山口女王(やまぐちのおほきみ)、そして3人目、時代は少し下って平安末期から鎌倉時代にかけての和歌の第一人者、藤原定家(ふじわらのていか)です。

さて、第一夜となる今夜の物語、大伴家持と山口女王との相聞を軸に、揺れ動く男女の心模様が展開されていきます。藤原定家には「もののあはれ」の情緒を現代に蘇らせてもらいます。

\*この間に相田雅美、板付き

見えないけれども大切な価値、現代社会にもつながる、自然観・美意識・心のありようなど「古代人の情感」を蘇らせ「歴史都市」この多賀城にたっぷり浸っていただく二夜でございます。

さあ、多賀・光の多面体の絵巻物を広げてまいりましょう。見えてきましたのは、「唐の貴人」の姿です。

それでは唐の貴人が奏(かな)でる中国の楽器二胡の演奏からお聴きいただきます。……3’



写真16.多賀・光の多面体公演

◇「中国(唐)の貴人」が登場

①<Glimmerかすかな光>……7’

楽曲:二胡(能舞台上で演奏)+宇都宮理人シンセサイザー演奏

演奏団:シンセサイザー

指揮:なし



曲名:不送帖(儂い想い)

展開:◇演奏中心

前半は演奏のみ。藤原定家(中川)、演奏の途中で サブステージ1に到着し、ひとり演奏を聴く。\*雨の場合は舞台上には山口が立つ

衣裳:中国(唐の時代)楊貴妃風衣装で登場、

ただし雨の場合は中村がステージ上に立つ。

唐の貴人(二胡奏者)…相田雅美(小雨の場合中村)

藤原定家…中川雅寛

ナレーション②この絵巻物は、時代を飛び越えて展開してまいります。まずは、鎌倉時代の初めに飛びます。

『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』『小倉百人一首』をはじめ数々の歌を編纂し、柿本人麻呂、山部赤人(やまべのあかひと)、紀貫之と並ぶ古典的な香気を湛えつつしかも新鮮な和歌を詠んだ大歌人、藤原定家の登場です。清少納言とも交遊をもち、本歌取りという和歌の高度な技法を体系化し、都では名の通った一流の歌人でした。

定家の美意識は、後の能楽や茶道にも大きな影響を与えました。本日は現代に甦った佐近衛中将(さこんえのちゅうじょう) 藤原定家を演じる中川雅寛の舞と和歌によって定家の世界観に浸っていただきます。…2'



写真17.多賀・光の多面体公演

\*この間中川板付きまたは登場

◇「千年の享受」～桜色の庭の春風あともなし…

②<Light光明>……………15'

楽曲:坂本龍一作曲:

「七人の侍」よりエンディングテーマ

坂本龍一作曲: Reversing

坂本龍一作曲: Rain

演奏ピアノ/高塚美奈子、ヴァイオリン/平松典子、電子オル

ガン/相澤 堇

指揮: なし

展開:◇舞踊と劇(台詞の中川が行う)

藤原定家(中川)、サブステージから歩いて能舞台へ移動。

和歌(台詞)+舞

●ナレーション(影アナ:あさの):

「和歌はたくさんの徳目の親、多くの幸福の根本をなすものである。…<中略>…長い短いの別はあるが、下々の感情を述べて身分の高い人々の上聞に達したり、上流の人々の有徳を述べて下々を教化しようとしたり、遊宴に参加して感懐を書き表したり、あるいは美しいものを雅やかに表現したりしてきた。まことにこれこそ、世を治め、民を撫育する大きな徳行であり、風景を賞美し、物事を楽しむ手本である。」(新古今和歌集、真名序より)

藤原定家の新古今和歌集より

●口上(中川)・歌「桜色の庭の春風あともなし訪(と)はばぞ人の雪とだに見ん」(庭を桜色に染めるように花を散らしていた春風もう終わってしまった、人が訪ねてきたら庭に雪が散っていると思うだろう。)『新古今和歌集』巻一春歌下 134

『小倉百人一首』に収められている定家の



写真18.多賀・光の多面体公演(日舞:中川雅寛)



●口上(中川)・・歌「来ぬ人をまつほの浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ」『新勅撰集』巻13・恋3・849(いつまでも現れない貴方を待っていると、まるで松帆の浦の夕風の時に焼く藻塩のように、私の身はずっと恋焦がれるのです。)藤原定家…中川雅寛(日舞)

\*場面転換——間——

ナレーション③また、この絵巻物は時代を遡り、奈良に都が置かれた万葉の時代へと移ります。奈良時代は聖武天皇が仏教の力で国を護ろうとその中心的な寺院として東大寺を創建した時代です。その本尊である大仏様は、世界を照らす仏、ひかり輝く仏であり、人々が思いやりの心でつながり、絆を深めることを願っているとされます。\*もののあわれの世界観が展開。

大伴家持は、この時代の貴族、そして大歌人です、223首の和歌を詠んだとされています。『小倉百人一首』では中納言家持という名で知られ、歌人であるほか、政治家としても優れ、権勢を誇っていました。陸奥国に多賀・階上の両郡を、正規の郡に昇格させて官員を常駐させるなどの功績を残しています。

それでは、いよいよ、大伴家持の登場となります。家持は晩年(延暦3年784年)に、持節征東將軍(じせつせいとうしょうぐん)に任ぜられ、蝦夷征討の責任者として多賀城にやってきます。

そして、この絵巻を彩るもう一人謎多き山口女王が現れます・・2'

\*この間で津村能舞台に板付き



写真19.多賀・光の多面体公演(舞:津村禮次郎)

◇古今和歌集・「塩釜の 前に浮きたる 浮島の…」

③<Brilliance輝き>……………23'

楽曲:箏箏による演奏、

ブッチーニ作曲:『マダムバタフライ』より「ハミングコーラス」

ブッチーニ作曲:『ラボエーム』より「私の名はミミ」

坂本龍一作曲: 新しい靴を買わなくちゃ

演奏:電子オルガン/相澤堇、ヴァイオリン/平松典子、ティンパニー/三上恭伸、

和楽器/笙、箏箏(ひちりき)、笛

笙/真鍋尚之(まなべなおゆき)箏箏/栗山葵衣(くりやまあい)笛/高橋竹仙

指揮:佐藤淳一 副指揮:堀内由起子

展開:◇劇と舞の相聞:

大伴家持(津村)、歩いて水上能舞台まで登場。ひとさし舞う。



写真20.多賀・光の多面体公演

●口上(津村)・・歌、「陸奥はいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」。

謎の山口女王(中村明日香)が、対岸の小道を通りサブステージ1に登場。

\*介添え役必要、子どもたちが途中で合流。

●口上(中村)・・「塩釜の 前に浮きたる 浮島の 憂いて思ひのある世なりけり」古今和歌集 山口女王\*山口女王(やまぐちのおほきみ 生没年未詳、伝不詳)。

ダンスの相聞:山口女王(中村)の演技+ダンス。子どもたちのダンスも挿入大伴家持は、山口を能舞台上から見つめる。藤原定家はハケ

大伴家持…津村禮次郎 謎の女王(山口女王)…中村明

日香 従者・女官…照井雪絵 子供たち…多賀城市民  
\*影アナ(あさの)・休憩の案内他  
[休憩]15'



写真21.多賀・光の多面体公演(中村明日香)

◇ライティングショウ④<Beam光線>……5'

楽曲:電子楽曲 宇都宮理人の即興演奏  
演奏団:シンセサイザー 指揮:なし

展開:◇ライティングショウ.その1 ショウの開始と同時に歩いて能舞台に向かう。自由な動作でポーズ。山口女王が能舞台上で、一人たたずみ、遠くを眺めている。ショウ終了と同時にハケ。(山口サブステージへ)

山口女王…中村明日香 従者・女官…照井雪絵  
ナレーション④ 大伴家持に想いを寄せる山口女王、家持にはその想いも届かず片思いのままです。何度も和歌を送っても返歌はありません。それもそのはず、大伴家持には思いを抱く坂上大嬢(さかのうえのおほひめ)がいたのです。坂上大嬢(おほひめ)の化身「鳥栖迦・トスカ」と大伴家持の化身「蒲羅導師・カヴァラドシ」の歌の相聞の場面です。

坂上大嬢は、家持の従妹にあたり、後に家持の妻となる女性です。それゆえ2人の絆は強く、多くの相聞の和歌が残されています。



写真22.多賀・光の多面体公演(歌:中鉢聡と早坂知子)

●口上大伴家持\*…「忘れ草 わが下紐に着けたれど醜(しこ)の醜草 言にしありけり」(にくらしい忘れ草だ 貴女を忘れようと噂の草を肌身離さず持ってたけれどちっとも役にたたないよ)坂上大嬢へおくったうた。  
そのようなことを知りつつも、山口の未練(恋)はつづいていきます。……3'

\*この間に歌い手は能舞台に板付き

◇大伴家持とその愛人・歌による相聞オペラ

⑤<Twinkle星の光り>………30'

楽曲:ブッチーニ作曲:『トスカ』より「歌に生き愛に生き」ソプラノ/文屋小百合ブッチーニ作曲:『トスカ』より「星は光りぬ」テノール/中鉢聡ブッチーニ作曲:『トスカ』より「テ・デウム」合唱

演奏:電子オルガン/相澤菫、ヴァイオリン/平松典子、ティンパニー/三上恭伸

\*文屋小百合は坂上大嬢(おほひめ)の化身(鳥栖迦・トスカ) 能舞台中央で歌う。

\*歌(文屋)終了前に中鉢(蒲羅導師・カヴァラドシ)橋掛かりに登場し、ゆっくり能舞台へ歩き始める。舞台中央に到着し、伴奏とともに歌い始める。文屋寄り添って聴く。

\*合唱団・中村それぞれ板付き 『テ・デウム』…大人合唱団

編曲:相澤菫指揮:佐藤淳一 副指揮:堀内由起子



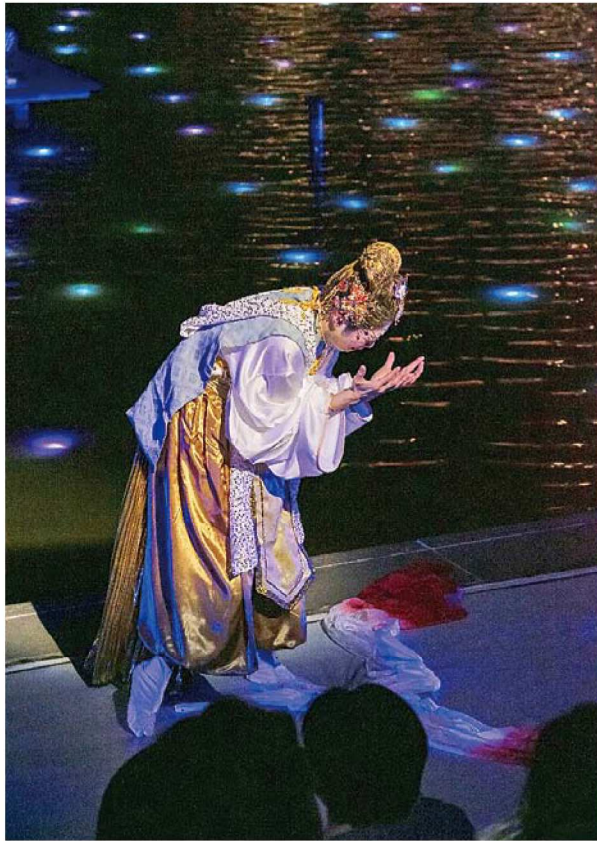


写真23.多賀・光の多面体公演(中村明日香)

展開:◇歌(オペラアリア)による相聞:大伴家持の化身<蒲羅導師>と大伴の愛人、坂上大嬢(おほひめ)の化身<鳥栖迦>のアリア(歌)による相聞。山口女王はサブステージ2で悔しさのポージング。(写真23)



写真24.多賀・光の多面体公演(中村明日香)

歌い終わり、それぞれハケ、山口女王は居残り次のシーンへ。合唱終了に合わせ暗転。文屋・中鉢ハケ、合唱団続いてハケ。

大伴家持の化身 ……中鉢聡坂上大嬢の化身 ……文屋小百合 山口女王…中村明日香 民衆…大人合唱団



写真25.多賀・光の多面体公演(中村明日香)

◇山口女王の恋情と寂しさ

⑥<Flash閃光>……………6'

楽曲:シベリウス作曲:『5つの小品』(樹木の組曲)より「樅の木」

演奏:電子ピアノ/高塚美奈子指揮:なし

展開: ◇ライティングショーその2:\*シンセの音楽で中村移動、介添えランタンまたは提灯。

●口上(中村)・恋情:山口女王の和歌「葦辺より 満ち来る潮の いや増しに 思へか君が 忘れかねつる」(葦辺から潮が満ちて来るようにますます募るのは恋の思いでしょうかあなたのことが忘れられないでいます。)

山口女王が森の小道(対岸の道)を通り、ひとり寂しく史跡に去っていく。

ピアノソロ大伴家持が佇み、遠くを眺め、台詞を言う。

ナレーション⑤-1大伴家持の晩年(延暦3年784年)には、持節征東將軍(じせつせいとうしょうぐん)に任ぜられて、蝦夷征討の責任者となります。しかし翌年、延暦4年8月28日(785年10月5日)には、(奈良という説もありますが、)多賀城で死没することになります。

●独白の台詞(津村)・「人が愛おしいのは、花が散るごとく、誰にも、「死ぬる」という別れがあるからではないのか…。」(自らに言い聞かせるような詠嘆)

ナレーション⑤-2片思いの山口女王、家持に対する恋情は募るばかり。現実と夢の世界に漂いながら森の道に帰っていきました。……2'

山口女王…中村明日香 従者・女官…照井雪絵 大伴



家持…津村禮次郎

[終演]

アナウンスメント(影アナ:あさの)…3'

## ■第2夜:5月5日の構成[18:30～20:30]

大伴家持の能舞台へ登場・能舞より始まる。相聞劇・ダンスと、化身たちのオペラアリアと合唱。様々な演奏を経て現代への架け橋へ。

アナウンスメント(影アナ:あさの)…一般の注意事項と2日間にわたるイベントの案内、SNSでの写真・動画はノーフラッシュでお願い、拡散OK、本日の時間割など…3'

[開演]

飯田利加サブステージに登場、ナレーションの後ハケ(以下同じ)

ナレーション① 多賀・光の多面体、昨夜に引き続き2夜目の開幕です。わたくしこのオペラのナレーションを務めさせていただき飯田利加と申します。皆さまには最後までお付き合いいただければと思います。

さて、この企画は、古代と現代を結ぶ「オペラチック・ナイト」としてありますが、みなさまには歌と舞やダンスによる音楽劇、光のショウを加えた《動く絵巻物》としてご覧いただければと思います。

古代の日本では、趣深いこと「=もののあはれ」が、最高の価値とされました。この物語も「もののあはれ」を主題としながら、男女の相聞が様々な形で繰り広げられることになっています。「相聞」とはもともと親・兄弟・友人の安否を尋ねることですが、「万葉集」ではやがて男女の恋愛を詠った和歌をまとめてそう呼ぶようになります。

今夜の物語には多くの登場人物が現れますが、中心となる人物は3人です。陸奥国「多賀城」で没したとされる万葉の大歌人、大伴家持(おおとものやかもち)、2人目は、その大伴家持に恋の歌を贈った謎多き万葉の女流歌人、山口女王(やまぐちのおほきみ)、そして3人目、時代は少し下がり平安末期から鎌倉時代にかけての和歌の第一人者、藤原定家(ふじわらのていか)です。

さて、第二夜となる今夜の物語も、昨夜に引き続き、大伴家持と山口女王との相聞を軸に、揺れ動く男女の心模様が展開されていきます。

\*この間に高橋出番用意



写真26.多賀・光の多面体公演・大伴家持・山口女王・笠女郎

見えないけれども大切な価値、現代社会にもつながる、自然観・美意識・心のありようなど「古代人の情感」を蘇らせ「古の歴史都市」この多賀城にたっぷり浸っていただく二夜でございます。

さあ、多賀・光の多面体の絵巻物を広げてまいりましょう。今夜最初に登場するのは大伴家持の祖父、大伴安麻呂です。

飛鳥時代から奈良時代にかけての貴族で、自らも万葉歌人として作品3首が「万葉集」に収録されています。今宵、大伴安麻呂の笛の音によって、古代の世界に誘(いざな)います。…2' \*ナレーション終了後演奏しながら能舞台へ  
◇大伴家持の祖父・安麻呂が現れる



写真27.多賀・光の多面体公演・笛(高橋竹仙)

## ①<Glimmerかすかな光>…………7'

楽曲:未定(高橋指定曲)演奏:高橋竹仙

展開:◇笛ソロ(高橋竹仙)橋掛かりを歩きながら演奏し、



能舞台で演奏、終了後ハケ大伴安麻呂(家持の祖父)/笛演奏者…高橋竹仙

ナレーション② 次の舞台は、権勢を誇る大伴家持が登場します。大伴家持が生きた時代、万葉の文化が花開き、奈良の都は栄華を誇ります。ならの都には、聖武天皇によって東大寺が創建され、その本尊である大仏様は、光輝く仏として世界を照らし、人々が思いやりの心でつながり絆を深めることを願ったとされる時代です。

家持は、万葉集の編集にも深く関わったことで知られています。万葉集は全20巻にわたり、その最後は家持の歌で飾られます。万葉集に掲載されている家持の歌は全部で473首。ほかのどの歌人よりも多く収められています。

大伴家持の家系は律令制のもとで高級官吏として歴史に名を遺し、権勢を誇りました。家持を巡る奈良時代の女人たち、大神女郎(おほみわのいらつめ) 中臣女郎(なかとみのいらつめ)・河内百枝娘子(かわちのももえをとめ)・巫部麻蘇娘子(かななぎべまそをとめ)・栗田女娘子(あはためのをとめ)・紀女郎(きのいらつめ)・日置長枝娘子(へきのながえのをとめ)・安倍女郎(あべのいらつめ)などが大伴家持への恋心を和歌にして詠い、相聞歌を交わしています。

また家持は都や地方の諸官を歴任し、優れた政治家でもありました。その赴任先で多くの女性と相聞歌を交わしていたと思われます。(数多くの歌を残した家持ですが、42歳で詠んだ歌を最後に68歳でその生涯を終えるまで家持が詠ったとされる歌は残っていません。)大伴家持には、多賀城が最後の赴任地となりました。今宵、演ずるのは能楽師・津村禮次郎です。舞台ではその様子を藤原定家が前方からじっと見つめます。……2'

●ナレーション:(影アナ:あさの)大伴家持の和歌紹介

「わが宿の いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕べかも」(私の家の、ささやかな竹林を吹く風が竹の葉をそよがせてさやさやと鳴る、その音のいかにもかすかなこの夕べであるよ)、または「うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば」

◇権勢を誇る大伴家持の舞



写真28.多賀・光の多面体公演・大伴家持(能楽師・津村禮次郎)

②<Light光明>……………25'

楽曲:津村指定曲 パロックなど未定

演奏団:和楽器/笙・箏+電子オルガン+ヴァイオリン/真鍋尚之(まなべなおゆき) 箏/栗山葵衣(くりやまあい)

指揮:佐藤淳一 副指揮:堀内由起子

展開:◇大伴家持の権勢を示す舞

大伴家持が能舞台へ登場・能舞。次々に女人(5人程度)が登場し、入れ替わり大伴家持と絡む。

\*4人の女人候補:大神女郎(おほみわのいらつめ)、河内百枝娘子(をとめ)、栗田女娘子、紀女郎(きのいらつめ)など

●口上(女人たち1)…大神女郎(菅原)「さ夜中に友呼ぶ千鳥物思ふとわびおる時に鳴きつもとな」(夜中に友を呼ぶ千鳥が鳴いている。私があなたを恋しく思い気が滅入っている時にむやみに鳴いていることか)

●口上(女人たち2)…栗田女娘子(後藤)「思い遣るすべの知らねばかたもひの底にそ我は恋なりにける」(片思いのどん底に沈んで私は恋するようになりました)

●口上(女人たち3)…河内百枝娘子(さくら)「はつはつに人を相見ていかにあらむいづれの日にかまた外(よそ)に見



む」(ほんのちょっとお目にかかって、いつの日かまた以前の  
ようにそ事としてあなたを見ることができるのかしら)

●口上(女人たち4)・紀女郎(白鳥真由美)「玉の緒を  
沫緒(あわお)に搓りて結べらばありて後にも逢はざらめや  
も」(白玉の糸を結んでおいたなら、後々でも逢えないことが  
ありましようか)

●口上(家持)……津村「百歳に老いて舌出でてよよむとも  
我は厭はじ恋は増すとも」(あなたは百歳になって、歯が抜  
け口元が締りなくなり舌が出てよろよろ歩いていても、私は  
いいと思います、恋心が増すことはあっても。)といった諧謔  
(戯笑)性のある返歌を家持は年上の紀女郎に贈っている。

藤原定家は床几に腰かけ、サブステージ2で見つめるポ  
ーズ



写真29・30.多賀・光の多面体公演(菅野友紀と後藤美香)

大伴家持…津村禮次郎、藤原定家…中川雅寛、女人たち  
(4名)…菅原友紀1、後藤美香2、白鳥真由美4、白鳥さく  
ら3

◇舞による相聞と好奇心の子どもたち

ナレーション③-1 華やかな空気に包まれた大伴家持で  
したが、老境となった今、陸奥按察使持節征東将軍、鎮守  
府将軍という重い役目を背負って多賀城に赴任すること  
になります。待っていたのは…素朴な子どもたち、(間\*出てく  
る山口女王を見ながら)…

そして時代を超えて定家もいる。不思議な時空間が出現し  
ます。……2'

ナレーション③-2その子どもたちの中に混じって山口女王  
がまっています。



写真31.多賀・光の多面体公演・藤原定家(中川雅寛)

### ③<Flash閃光>……………15'

楽曲:ドリーブ作曲:『ラクメ』より「花の二重唱」

リスト作曲: 愛の夢、坂本龍一作曲「水の中のバガテル」

演奏:電子オルガン/相澤堇、ヴァイオリン/平松典子、電子ピ  
アノ/高塚美奈子、ティンパニー/三上恭伸 指揮:佐藤淳  
一副指揮:堀内由起子

展開:◇山口女王を軸とした劇ダンス+地上のダンス、子ど  
ものダンスに合わせた ライティングショウその1:風の音(S  
E)とともに山口女王サブステージに登場。明るいワルツの  
音でひとしきり踊り、その子どもたちがやって来て、呼び寄  
せ、みんなで踊り始める。藤原定家(その場での踊りあり)





写真32.多賀・光の多面体公演・子どもたち

●口上(中村)・・・歌恋情:「我が背子は 相思はずとも  
敷栲(しきたへ)の 君が枕は 夢に見えこそ 」(貴方が  
想ってくださなくともせめて貴方の手枕は夢に見たい、(あ  
るいは)せめて私の夢に見えてください)。

山口の相聞歌には直接答えずに、

●独白台詞(津村):「誰しもが、この日・この時を夢中に生き  
ている。私にとって夢とはすべてを忘れて遊ぶ童子らかもし  
れぬ・・・。」

舞の相聞:山口女王・・・中村明日香

従者・女官・・・照井雪絵

大伴家持・・・津村禮次郎、藤原定家・・・中川雅寛、子供たち  
(15～20人)・・・市民公募

\*影アナ(あさの)・・・休憩の案内他

[休憩]15'

◇ライティングショーその2

#### ④<Beam光線>……………5'

楽曲:宇都宮の即興演奏演奏:シンセサイザー/宇都宮理  
人指揮:なし

展開:◇ライティングショーその2:

ナレーション④ 山口女王は《夢》を見ます。大伴家持と結  
ばれる夢です。この夢の中ではもう一人の家持に献身の情  
を捧げる女人(リュウ琉)が登場し、これを交えて、激しい男  
女の相聞(問答)が繰り返されることになります。山口女  
王の化身(陶爛・姫)、大伴家持の化身(唐夫)、笠女郎(か  
さのいらつめ)の化身(琉)の3人です。加えて民衆が歌い  
ます。「オペラチック・ナイト」のハイライトです。…2'



写真33.多賀・光の多面体公演・3人のオペラ歌手

●口上(文屋)・・・笠女郎(かさのいらつめ)の和歌「思ひに  
し死にするものにあらませば千度(ちたび)そ我は死に反  
(かへ)らまし」(恋のおもいで死ぬものであったら、私は千  
度繰り返して死んでいましょう)と歌い、家持に対する強い  
思慕と献身の情が現れています。

◇山口女王と大伴家持の化身による激しい相聞

#### ⑤<Brilliance輝き>……………30'

楽曲:ブッチーニ作曲:『トゥーランドット』より「この御殿の中で」  
/ソプラノ早坂ブッチーニ作曲:『トゥーランドット』より「誰も寝て  
はならぬ」/テノール中鉢ブッチーニ作曲:『トゥーランドット』より  
「氷のような姫君の心も」/ソプラノ文屋ブッチーニ作曲:  
『トゥーランドット』より「月の出はなぜ遅いのか」/市民合唱団\*  
ジャコモ・ブッチーニ作曲オペラ「トゥーランドット第2・3幕」より  
演奏:電子オルガン/相澤堯、ヴァイオリン/平松典子、ティン  
パニー/三上恭伸

編曲:相澤堯 指揮:佐藤淳一 副指揮:堀内由起子

展開:◇歌(オペラアリア)の相聞:

歌い手は、山口女王の化身が能舞台、大伴家持の化身  
は、山口女王(早坂)と入れ替わり能舞台中央で歌う。琉は  
サブステージ2またはアクティングエリア中央で歌う。台詞の  
相聞(3つの謎かけ)\*は、家持と入れ替わり、橋掛かりで問  
答、山口(中村)が化身の脇で叫ぶ、早坂は、ポーズのみ。  
答えるのは大伴家持の化身(唐夫)が行う。笠女郎(いらつ  
め)の化身がリュウ(琉)として登場歌う。そのあと、能舞台  
上にいる山口女王の化身のもとに大伴家持の化身が寄り  
添い歌う、合唱団はサブステージに準備、合唱が始まり、  
リュウは能舞台へ向かう。合唱終了とともに能舞台上には4  
人そろって、暗転。





写真34.多賀・光の多面体公演(合唱団と演奏団上)

### ◆3つの謎かけ【トゥーランドット姫】

◆謎かけ問答1謎の1「暗い夜に虹色のまぼろしが飛ぶ。それは空高く翼を広げすべて世界の皆が探し求めるもの。だがそのまぼろしは夜明けと共に消える心の中で生まれ変わるために毎晩生まれそして毎日死ぬ。それは何か!」【カラフ:中鉢】そうだ! よみがえる! よみがえる!(歓喜に満ちて)それは「希望」だ!

### ◆謎かけ問答2

【トゥーランドット】謎2「炎のよう燃え立つがしかし炎ではない。それは、時には狂乱し熱く燃える!力を失えばそれは澱む。あなたが死んだりすれば冷たくなるがあなたが征服を夢見るなら燃え立つ。燃え立つ!そして鮮やかな夕日のように輝く!それは何!」【カラフ:中鉢】そうだ燃え上がりそして同時に弱まる。この血管の中で、それは「血」だ!

### ◆謎かけ問答3

【トゥーランドット】謎3「あなたが自由でいたければあなたを奴隷にするし、あなたが下僕となることを受け入れるならば、あなたを王にする!家持の化身「唐夫」よ! 炎を与える水それは何か?」【カラフ:中鉢】「私の勝利だ今、あなたは私のものだ!私の炎は あなたを融かすだろう!」トゥーランドット姫!

山口女王の化身(陶爛.姫)…早坂知子、 大伴家持の化身(唐夫)…中鉢聡笠女郎(かさのいらつめ)の化身(琉)…文屋小百合山口女王の[謎かけ台詞役]…中村明日香合唱団…多賀城市民合唱団

ナレーション⑤ 一瞬の幻影・夢であっても家持と結ばれた山口女王の気持ちは透き通り、晴れています。夢から覚めたいま、自分と一緒に空を見つめる子どもたちがいます。……2' ◇月明かりの中で《もののあわれ》を感じる



写真35.多賀・光の多面体公演・ライティングショウ

### ⑥<Twinkle星の光り>………10'

楽曲:武満徹作曲:「小さな空」子ども合唱ドビュッシー作曲:「月の光」演奏:電子ピアノ/高塚美奈子、電子オルガン/相澤堯、ヴァイオリン/平松典子指揮: 佐藤淳一副指揮:堀内由起子

展開: ◇子どもの合唱「小さな空」を能舞台上で歌い、終了後ハケ。ピアノソロで終了。\*照明は青い光(ブルー転)で終わる。

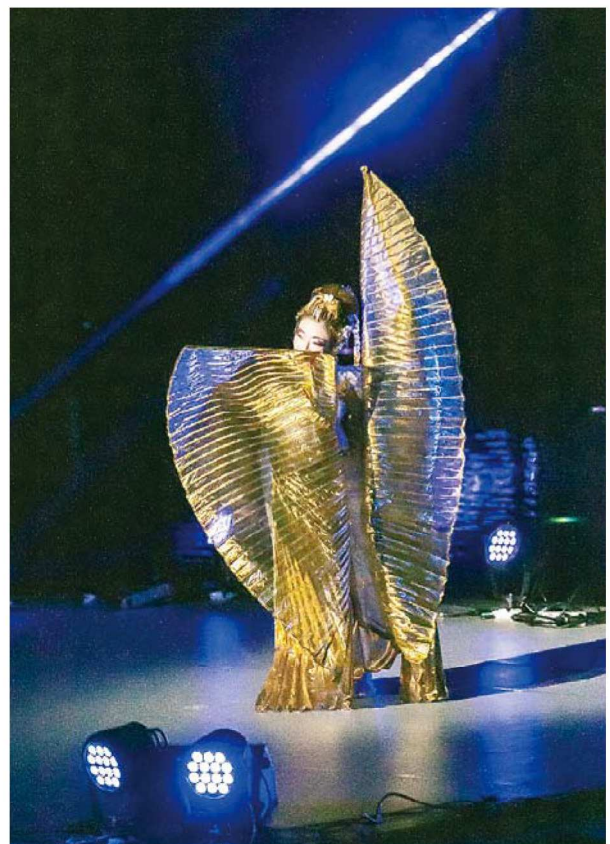


写真36.多賀・光の多面体公演・山口女王の舞(中村明日香)



山口女王…中村明日香従者・女官…照井雪絵子供たち  
(15～20人)…市民公募

アンコール(案):サン=サーンス作曲「ノッテステラータ(星降る夜)」\*テノールを中心にソリスト3人による協演



写真37多賀・光の多面体公演・オペラ歌手によるアンコール

カーテンコール… [終演]

アナウンスメント(影アナ:あさの)…3'

[参考] 以下劇中で使う可能性のある和歌

山口女王⇒大伴家持

●相聞歌:恋情「もの思ふと 人に見えじと なまじひに  
常に思へり ありぞかねつる」(恋のものの思いを人にさとら  
れまいとなまじ心を抑えながら やはりいつも思ってる 堪  
えがたいことですよ)

怨恨:「相思はぬ 人をやもとな 白栲の 袖漬つまでに  
音のみし泣くも」(愛し合う事ができない人をいたずらに  
慕い求めては 袖が濡れるまで想って泣くの)

恋情:「我が背子は 相思はずとも 敷栲の 君が枕は  
夢に見えこそ 」(貴方が想ってくださなくともせめて  
貴方の手枕は夢に見たい)

恋情:「剣太刀 名の惜しけくも 我れはなし 君に逢は  
ずて 年の経ぬれば 」(世間に立つ浮名など私は惜しく  
ありません 貴方にお逢いせずに年月も経ってしまったの  
で)

恋情:「葦辺より 満ち来る潮の いや増しに 思へか君  
が 忘れかねつる 」(葦辺から潮が満ちて来るようにま  
すます募るのは恋の思いでしょうかあなたのことが忘れら  
れないでいます)



写真38多賀・光の多面体公演・山口女王の舞(中村明日香)

大伴家持⇒坂上大嬢

大伴家持\*…「忘れ草 わが下紐に着けたれど 醜(し  
こ)の醜草 言にしありけり」(にくらいい忘れ草だ 貴女を  
忘れようと噂の草を肌身離さず持ってたけれどちっとも役に  
たたないよ)坂上大嬢へおくったうた。

\*家持をめぐる女性坂上大嬢(さかのうえのいらつめ)

笠女郎(かさのいらつめ) 山口女王(おほきみ)大神女郎  
中臣女郎 娘(おとめ 他 3人程) 妾 河内百枝  
娘 巫部麻蘇娘 童女(おとめ) 栗田女娘 娘  
紀女郎 日置長枝娘 安倍女郎 平群氏女郎  
等

大伴家持の和歌

大伴家持の歌に『春愁の三絶』と言われる3句がある。

「春の野に 霞たなびき うら悲し この夕暮れに 鶯な  
くも」

「わが宿の いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この  
夕べかも」

「うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひと  
りし思へば」



写真39.多賀・光の多面体公演(演奏団のメンバー)



写真40.多賀・光の多面体公演(カーテンコール)

相聞(そうもん)とは、互いに安否を問って消息を通じ合うという意味の言葉であり、雑歌・挽歌とともに『万葉集』の三大部立を構成する要素の1つである。

## 6.「多賀・光の多面体」公演評

公演をご覧いただいた2人の専門家によるご批評をいただいたので、以下に紹介しておく。両者とも2夜にわたる公演をすべてご覧いただいたことを付け加えておきたい。

乗越たかお(Norikoshi Takao) (小説家、舞踊評論家)

[二夜連続上演「多賀・光の多面体」]

5/4-5@東北歴史博物館水上野外能舞台

ダンス、能、日本舞踊、オペラ、生演奏に生合唱、光のアート、贅沢な各要素が不思議な一体感がある。

古楽(二胡や笙・箏・篳篥)、日本舞踊、能楽、ダンス、光のアート、オペラ……それぞれが6つの光の名を冠したシーンで緩くつながりつつ、それぞれの個性を生かした。この

手のイベントにありがちな要素をもちこみすぎることなく「坂上大嬢と相思相愛の大伴家持に寄せる山口女王の思い」という中心に外すことなく進めていたのが良かった。出演者の多彩さが、シンプルなストーリーラインに沿って滑らかに機能していったからだ。

何よりも大伴家持を演じた津村禮次郎のどっしりとした存在感と、動いてよし語って良しの音声が、作品全体の要石となって各要素をしっかりと定着させていた。能楽師の大家でありながらコンテンポラリー・ダンス作品にも開かれた感覚を持っている師ならではの存在である。

また後の時代からこの時代を顧みる藤原定家に扮した中川雅寛(中川流)も、みずみずしい存在を見せた。

全体を演出した中村明日香は、コンテンポラリー・ダンス作品を過去に見ている。今回は大人数で自らも山口女王を演じていた。ロイ・フラワーのような袂が金色に大きく広がる衣裳を使い、テーマである光を実体化させていた。淋しい内面を子ども達との歌とダンスによって明るく描き出す工夫も見せた。

いにしえの日本を描く本作でオペラが浮いていないのは、山口女王の叶わぬ恋を、かりそめ成就する夢の世界として描き出すときに、トスカやトゥランドットに仮託してひとつのシーンを創るからだ。ここでは本体と仮託された存在と「二人一役」になるわけだが、それぞれ特徴のある衣裳を共通して身に着けることで、同じ人物を二人で演じていることがわかり、物語に溶け込んでいた。中鉢聡(藤原歌劇団)・文屋小百合(二期会)・早坂知子。

そして何より水上野外能舞台の場所性である。後ろに小山と森を従えて、橋掛かりから水中に伸びている舞台。借景としては完璧で、1日目は風が強く寒さが厳しかったが、だからこそ作品世界に没入できた。

その空間を彩ったのがライティング・アーティストのヤマザキ ミノリだ。水舞台を取り囲むように水の中に仕込まれたLED330灯のインスタレーションが、本来は暗いだけの水面を、奥行きのある幻想的な空間として浮き上がらせていた。奥村知行によるレーザー光は風の強い屋外ではスモークが流れて空中で像を結びにくく苦労していたが、2日目はだいぶ出てきていた。特に森を効果的に照らすことで、逆に深々とした森の影を作り、空間に立体感をもたらしていた。

しかも素晴らしいことに、全てが生演奏で行われていたのである。ピアノ・高塚美奈子/シンセサイザー・宇都宮



理人/二胡・相田雅美/電子オルガン・相澤堇/ヴァイオリン・平松典子/笛・高橋竹仙/打楽器・三上恭伸/笙・真鍋尚之/箏・栗山葵衣 指揮・佐藤淳一/合唱指導・副指揮・堀内由起子

企画、構成、総合演出の志賀野桂一は、福島県白河市の白河文化交流館コミネスの館長で、これまでも光をテーマに森山開次出演の『スペースオペラKEGON』など、数々の舞台やイベントをプロデュースしている人だ。コンテンポラリー・ダンスへの造詣も深い。東北のダンスシーンを推し進めている。

また市長が2日とも来ていたことに感心した。展覧会がらみとはいえ、通常は冒頭に挨拶して帰ってしまう人も多いが、寒い中、そして2日間、最後までしっかり見た上に、最後は出口で観客を見送っていた。首長の文化への理解と情熱が、その地域の文化度に反映される。

東北のダンスシーンとしては、『踊る。秋田』フェスティバルがあるが、太平洋側でも活発な動きがあることをしれたのが何よりも収穫だった。この波を、広く伝えて、日本各地と連携して行ってほしい。(以下略)

## 《多賀・光の多面体～

### 「東大寺と東北展開連イベント」のレポートI

音楽ライター・小林信一

2018年5月14日(月) 発

▼「エッセイ@クラシック」№11 (2018.5.10) 多賀・光の多面体～「東大寺と東北展開連イベント」2018年5月4日(金)、5月5日(土) 東北歴史博物館 水上ステージ前

▼東北の古都、多賀城市。水上の能舞台で繰り広げられる「多賀・光の多面体」公演に行ってきた。噂には聞いていたが予想をはるかに超えて楽しめた2日間だった。

隣の東北歴史博物館では「東大寺と東北展」が同時開催されておりこちらもたくさんのお客様で盛況の様子だった。公演は博物館の横の人工湖に能舞台を設営し二夜にわたってレーザー光線をベースに古典芸能からオペラ、舞、合唱を取り込んだ総合芸術のステージを展開しようというものであった。

1日目。夕闇とともにまだ寒さが残る湖上には静けさのなか池にちりばめられた光の花々(アート・インスタレーション=ヤマザキ・ミノリ)がレーザー光線により美しく浮かび上がる。大陸から渡ってきた「二胡」の演奏が始まり、舞

手がこれに参加していく。そしてこの地に大きな関わりのある大伴家持と山口女王の恋を絡めていくという試みが単なるステージシーとは一味違うものになっている。2日とも大伴家持役を能楽師の津村禮次郎氏が演じ全体の狂言回しの役割を果たしたが彼を据えたことで全体が引き締まって感じられた。中でも能楽と現代舞踊が難しいステップを踏んで「相聞」を表現する場面は圧巻であった。(全体の振付・演出中村明日香)

2日目はオペラアリアを中心に中鉢聡、文屋小百合、早坂知子の3人のオペラ歌手が圧倒的な存在感でソロを務めた。すべての出演者に役が割り振られこの絶妙なキャスティングにも驚かされた。日舞、和楽、現代舞踊、などその芸の縛りをこえて展開されたひとつの作品として多賀城でなくてはできない新しい可能性を秘めたものであった。もう一つ特筆されるのは2日間にわたって合唱が大活躍。初日は大人の合唱がオペラを、2日目には児童合唱がなんと武満徹の「小さな空」を歌うなど、しかもこれがダンスつきで作曲者に聴かせたら喜んでくれるだろうと思われた。

大人の合唱曲が少しアレンジするとこんなことができるという見本のようなものだった。全体が大自然のなかで行われるわけだから予期せぬこともある。たとえば少し強い風が吹いたので光を効果的に出そうとした試みも完全な出来ではなかった。しかしながらこの日登場したすべての人々の思いが通じる迫力だった。出演した子供たちはこの日のことを長く記憶するだろう。プロフェッショナルな出演者、室内オーケストラやピアノの人々の野外での演奏も間近に見ることができた。そして感動を共にしたということが子供たちの将来に創造の芽を植えたことは間違いない。

全体を作り上げた制作者・プロデューサーの志賀野桂一さんは「今回の成功は集った聴衆もふくめてすべてのかかわりを持った人たちの熱意と創造への意欲の賜物です。」とおっしゃった。行政の力も大きかった。市長や市のスタッフも適所でよく動いていた。分業の現代、なかなかこういうことが難しくなっているという現状のなかでぜひ湖上での祭典を続けて行ってほしいと思った。人の温かみが感じられる2日間の「夢の多面体」であった。「クラシック・ニュース」は音楽情報を発信しています。

<https://www.facebook.com/classicnews.jp/> 多賀城市のイベント情報

<https://www.city.tagajo.miyagi.jp/.../taga-hikarinotamenntai>



## 7. 総括(まとめ)

### 舞台制作の課題

野外の舞台公演は、普段のホール公演と異なり多くの壁が横たわる。劇場的舞台装置を一から作らなければならないこと、それに伴う費用が高むことはもちろん、楽屋・照明・音響・イントレ・電源・テント・備品・オケピット・出ハケの袖幕がないのでどうするのか、指揮者と合唱団の場所が異なるための副指揮者の設定が課題となった。また、思わぬ伏兵が存在し、近隣の環境によってJR駅が隣接しており列車通過の音が遮断できない、駅の明かりが意外に明るくそれによって劇場的暗転がつかれない等等懸案の項目が際限なく出てくるのである。これらによって演出の考え方も変わってくる。

総合演出の筆者としては、先にも述べた通り、不測の事態に対応するため、場面を6つに細分割して進行させる舞台構成としたところであったが、それ以上に現実には厳しかった。照明プランは、公演に向け詳細を演出の中村明日香と詰めを行ったが、屋内劇場に慣れている中村との考えは相当に異なる場所があった。具体例を言えば、暗転を求められても、水中の光りのアート・インсталレーションは調光不可能であり、四方から明かりが漏れる野外という環境で、完全暗転のイメージを「ブルー転」をもって代替えるなどである。協議の時間切れもあり筆者が引き取るようになった。詳細プランを作成し照明の東北協立に渡したが、仕込みの段階で回路の不足や使用器具の問題から、明かりフィルターの番号通りにはいかないことが判明する。さらに場面ごとの細かなキッカケによるオペレーションも困難なことがわかった。現場での見切り発車に近い状態で公演が始まったのである。結果オーライであっても課題は残った。

また次元の異なる問題だが、公演の成否を左右するお天気だけは人智を超えている。2018年5月の連休4日と5日という日程は、天候が比較的安定している予報で、東大寺展の開催に合わせ設定した。しかし、実際には、寒さ、強い風と雨が公演前日のリハーサルまで続いた。

計画してきたリハーサルから本番までのスケジュールはこの天気によってズタズタにされたのである。(写真41)リハーサルの悪天候で体調不良者も出たが、本番は奇跡的に晴れ、元気に皆頑張ったのであった。



写真41.前日の雨でずぶぬれになりながらのリハーサル

入場券のことについて触れておくと、当初、筆者は有料企画で構想しており、その前提で進んでいた。有料企画の場合、通常は半年前、最低でも100日前には売り出しを開始しないと間に合わないのが常識となっている。しかし本企画は準備が進むにつれ、年が明けても未整理の項目が多かった。さらに雨天時の入場券の払い戻しルールなど2日間にわたることもあり、複雑な手続きとなることが予想された。結果は東大寺展の入場券の提示で、入場出来るルールとなった。結果は両日とも超満員で、想定した客席以外で見物する人も多く見られたのである。

### キャスティングと座組み

「多賀・光の多面体」のキャスティングでは、謎の姫山口女王が主役だが、企画の題名を決めたときに、即座に、多面体表現者を標榜する中村明日香に出演・演出を打診した。振り返ってみるとこの中村さんとの出会いがすべてを決めたともいえる舞台だった。リハーサルも充分に取れない天候とスケジュールの中で、演出も含め最高のパフォーマンスを発揮してくれた。

主役の3役のひとり津村禮次郎には、これまでも何度も名演に接しているとはいえ、今回の厳しい環境で、重厚な舞と、以下の大伴家持が言う2つの極め台詞をしっかりと演じてくれた。

＜人が愛おしいのは、花が散るごとく、誰にも、「死ぬる」という別れがあるからではないのか…。＞(自らに言い聞かせるような詠嘆)と

＜誰しもが、この日・この時を夢中に生きている。私にとっ



て夢とはすべてを忘れて遊ぶ童子らかもしれぬ……。>

定家役の中川雅寛は、若く才能のある踊り手であるが日舞もさることながら、構えや立ち姿に筆者は藤原定家を観たのである。

歌い手・演奏家では、中鉢聡、文屋小百合・早坂知子すべて東北出身のオペラ歌手となった。有り余る声量で2つのアリア歌い上げた中鉢、絶品の感情表現で聴衆を魅了した文屋、山口の化身役でトゥーランドットを歌い演じた早坂、少ない出番で強烈な存在感を示してくれたのである。

今回1人2役ではなく1役2人という特殊な設定であることから、体型の異なる2人分の衣装を用意しなければならないなど困難な状況があり、山中ガショウ(能楽師)には<和>と<古代>というコンセプトで衣装デザインを依頼し、素晴らしい仕上げをしていただいた。

演奏では指揮の佐藤淳一、堀内由紀子、電子ピアノ・音楽監修の高塚美奈子、笙の真鍋尚之、筆簾は栗山葵衣、二胡の相田雅美、笛の高橋竹仙、シンセサイザーの宇都宮理人、電子オルガン相澤薫、ヴァイオリン平松典子、打楽器は三上恭伸、市民公募の合唱団、子どもたちなどが出演した。特に高塚さんには、演者からの提案される楽曲、合唱曲、演奏曲の整理を含め多くの役を担っていただいた。飯田利加には、制作の全課程でのサポート、ナレーションでの出番もあり、八面六臂の活躍であった。こうした大勢の出演・演奏者、スタッフの献身によって公演ができたのである。

筆者は、こうした大掛かりな舞台公演(オペラ)には、「制作の座組み」、「出演(キャスト)」、「事務局」の3要素が良好に機能してこそ舞台が成立するものと考えている。多賀城市の場合、この3つが三身一体となって共感関係で結ばれていたように感じる。

## まちづくり

最後の本稿の主題であるまちづくりとの関係で、述べるとすれば、観客の反応を見る限り、「古代コンテンツの可視化」にはひとまず成功したと言って良いであろう。東大寺展への副次的効果も見られた。しかし、満席となったと言っても市民全体の波及という点では、道遠しというほかない。

まちづくりへのインパクトは、ここでとりあげた数年来の多賀・光の3部作を通じて、確実に何歩か進んでいる。今後は「多賀城1300年祭に向けて」という道程も示されている。多賀城という土地の過去・現在・未来を見つめながら、多賀

城でしか生まれない舞台制作をすることは、都市の文化によるリノベーションでもある。

多賀城が地域のアイデンティティを意識化しながら新たな都市の価値創造に向かっていくことに期待したい。

## 参考文献

- 『家持と恋歌』埴選書117小野寺静子著(株)埴書房2013年  
『万葉集』佐佐木幸綱著 NHK出版 2015年  
『新古今和歌集』上・下 久保田淳 訳注 角川ソフィア文庫 平成19年  
『ドゥルーズの哲学』小泉義之著 講談社現代新書 2000年  
『千のプラトール』ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ 宇野邦一ほか訳 河出書房新社 1994年  
『ドゥルーズを「活用」する!』澤野雅樹著 彩流社  
『花鳥風月の科学』松岡正剛著 淡交社 1994年  
『日本流』松岡正剛著 筑摩学芸文庫 2009年  
『東大寺』平岡定海著 教育社歴史新書 1977年  
『仏教思想のゼロポイント』魚川祐司著 新潮社 2015年  
写真撮影:©熱海俊一